



市立図書館国民読書年キャラクター“本の虫”

| | |
|---|-----------|
| 今年の3冊(日本の小説・社会科学) | p. 1 |
| お知らせ／講座・展示等 | p. 2 |
| 子ども向けイベント／おはなし会 | p. 3 |
| 今年の3冊(自然科学・人文科学・ティーンズ・児童書) | p. 4 |
| ホームページ http://www.city.yokohama.jp/me/kyoiku/library/ | 2010年12月号 |

司書が選んだ、今年の3冊 2010

2010年も多くの本が話題になりました。「日本の小説」「社会科学」「自然科学」「人文科学」「ティーンズ」「児童書」から3冊ずつ、司書が選んだおすすめの本を紹介します。

日本の小説の3冊

『一〇〇年前の女の子』 船曳由美/著 講談社

子どもも重要な働き手だった頃の明治 42(1909)年、栃木県高松村に生まれた少女、寺崎テイの物語。テイは妹たちと遊び、学校で学び、働いて成長します。里子に出された時のつらさや生母への思いは、長い間心の内にしまわれていましたが、テイが米寿を過ぎてから娘である著者に語られ、物語となりました。四季折々の農作業や行事など、北関東の農村風景が実に生き生きと描かれており、読む人に遠い記憶を呼び起こさせます。



『空気の階段を登れ 黎明期にはばたいた民間飛行家たち』 平木國夫/著 三樹書房

今年は「航空 100 年」とされます。明治 43(1910)年、ライト兄弟の初飛行の7年後、徳川好敏と日野熊蔵による日本初の動力機による公開飛行が、代々木練兵所(現在の代々木公園)で行われました。当時それを見るために毎日、代々木へと通いつめた青年がいました。後に日本の民間航空の草分けとなった伊藤音次郎です。彼の日記などをもとにした小説が今年、記念復刊となりました。著者は第 13 回横浜文学賞受賞者。明治から大正への激動の時代、日本の空を命懸けて切り開いた「一〇〇年前の男たち」の物語です。

『白い河 風聞・田中正造』 立松和平/著 東京書籍

今年2月に62歳で急逝した立松和平の絶筆です。足尾銅山の鉱山労働者を曾祖父にもつ著者は、足尾鉱毒事件について「歴史上の事件というより、風聞飛び交う近所の話だった」(『毒 風聞・田中正造』東京書籍1997年 後記より)と書いているように、事件を身近に感じ、生涯この題材を自らのライフワークとして書き続けたいと考えていました。本書は、著者が遺した鞆の中で見つかった原稿も含めて刊行されました。



社会科学の3冊

『街場のメディア論』 内田樹/著 光文社(光文社新書)

テレビ視聴率の低下、新聞部数の激減、出版不調——。「メディアの不調はそのままわれわれの知性の不調である。」と著者は語ります。不調の原因はどこにあるのか？さらに電子書籍の登場により激変期を迎えているメディアの社会的存在意義を探ります。神戸女学院大学の人気講義を書籍化した「街場」シリーズの4冊目です。

『菊とポケモン グローバル化する日本の文化力』 アン・アリスン/著 実川元子/訳 新潮社

“テクノロジー、遊び、消費文化における日本の制作物のクオリティを一言であらわす言葉は、「かわいい」をおいてほかにはない。”こう断言する著者は日本製の子どものおもちゃを研究するため来日したこともある文化人類学者です。1990年代以降「ポケモン」「たまごっち」などの日本のテレビ番組やゲームが、アメリカ市場に輸出され、広く海外市場に受け入れられる過程を解き明かします。



『ブルー・セーター 引き裂かれた世界をつなぐ起業家たちの物語』 ジャクリーン・ノヴォグラッツ/著 北村陽子/訳 英治出版

著者はアフリカで、10代の頃に自分が手放した青いセーターをまとった痩せた少年に偶然出会いました。それをきっかけに、慈善事業や先進国からの援助によって、貧困の状況がさらに悪化した現地の実情に目を向け、現地住民による貧困克服の取組に投資する、非営利組織を立ち上げました。2009年にグラミン銀行がノーベル平和賞を受賞したことで注目されている、マイクロクレジットについて知るためにもおすすめの一冊です。

